4）乳児 ERCP の麻酔管理

野口 良子（竹田総合病院 麻酔科）
小形 雅子（弁天橋病院 麻酔科）

最近，十二指腸ファイバースコープが細径化され，小児でも ERCP が積極的に行われるようになってきた．今回演者らは，生後28～85（平均61±18）日，体重 2,610～5,800（平均 4500±920）gr．の乳児11例の ERCP において麻酔管理上の問題点について検討した．検査前の状態は原疾患により中等度以上の肝障害を有している症例が多く，短時間の検査麻酔ではあるが，術前管理及び麻酔薬の選択その使用濃度に慎重な配慮を要する．内視鏡操作中は，ファイバーによる気管圧迫など換気状態に細心の注意を払うべきであろう．また手技上頻回の体位変換に伴う各種トラブルも生じやすく，麻酔管理上リスクが増加する．検査後も急性膵炎などの重篤な合併症に対する予防的処置も必要である．今後とも関連各科の密接な連携のもとに安全性向上に努めたい．

5）著しい高炭酸ガス血症を呈した悪性高熱症の1例

樋口 昭子・成瀬 隆倫
岩城 久美（富山県立中央病院 麻酔科）

扁桃腺摘出術中に，40.5℃に及ぶ高体温と 169mmHg の高炭酸ガス血症を来し，筋生検で悪性高熱症と診断された症例を経験した．

症例22才男性．化膿性扁桃腺炎のため扁桃腺摘出術が予定された．術前の検査成績には異常所見を認めなかった．チオペンタール 300mg，SCC60mg にて気管内挿管し，パンクロニウム 4mg 投与の後，GOE にて麻酔を維持した．麻酔開始よりやや頻脈を認め，麻酔開始45分後には140／分，60分後には160／分となり，体温は37.1℃から39.3℃に上昇した．ダントロレンが手元になく，体温は最高40.5℃に及んだがアルコールによる表面冷却，約 3000ml に及ぶ冷却輸液で対処し，救命しえた．ポートワイン尿，筋硬直は認めなかったが，当日尿中ミオグロビンは 74000ng/ml，血清 CPK は翌日に 2400IU/l を示した．後日筋生検を施行し，広島大学に依頼した，カルシウム誘発性カルシウム遊離速度は亢進しており，悪性高熱症であることが裏づけられた．

6）重症冠動脈病変による心原性ショックに対する救急蘇生

三井田 努（新潟市民病院 救命センター）
庭野 慎一・小田 弘隆
佐藤 広則・樋熊 紀雄（同 循環器科）

心原性ショックを合併した重症心筋梗塞の6例に対し，急性期冠状動脈造影，PTCA を施行した．ショック合併例では，全例で冠状動脈の複数に完全もしくは不完全閉塞を認め，重篤な冠状動脈病変があった．ショック例では，入院時心電図は ST 上昇が明らかなものは少なく，呼吸困難で初発するものがあり，左心不全に続発するショック，心筋梗塞と思われる症例もあった．IABP からの離脱が困難な症例もあり，IABP からの離脱には，肺動脈拡張期圧が 10mmHg 以下で安定し，心係数が 3L/min/m2 程度必要と思われた．

7）重症低肺機能患者開胸術々後呼吸管理の1例

飛田 俊幸・馬場 洋
熊谷 雄一・多賀紀一郎
福田 悟・下地 恒毅（新潟大学 麻酔科学教室）

今回，我々は，重度拘束性呼吸機能障害（%VC 約25%）にさらに椎体圧迫による気管支閉塞を来した患者の気道開通術に対する術後呼吸管理を経験したので報告する．

症例は，25才，女性．17才時先天性後側弯症の診断にて，三期的に矯正術を施行された．1988年11月呼吸器感染にて呼吸困難，チアノーゼ出現し，某院にて44日間気管内挿管下に呼吸管理を受けた．椎体による右中間気管支幹の圧迫閉塞が疑われ，1989年3月笑気－エンフルレン－フェンタニル麻酔下に右側開胸，圧迫部椎体及び矯正金具の一部切除術が施行された．術後 IMV によるウィーニングは成功せず，PSV にきりかえ，術後5日目に抜管，22日目に独歩退院した．

本症例の経験に基づいて若干の考察を行う．

8）新潟市民病院救命救急センター開設以来2年間の急性中毒患者の統計的考察

小野寺真由美・丸山 正則
北原 智子・小形 雅子（新潟市民病院 麻酔科）
本多 拓（同 救命救急センター）
森田 幸裕（同 内科）
大西 洋司（同 神経内科）

昭和62年4月～平成元年4月の2年間に救命救急センターを受診した急性中毒の患者で原因物質，年齢，予後

を調べた．中毒起因物質は，外来では幼小児のタバコ誤飲が多いため家庭用品が多く，ついで医薬品，農薬，ガスであり，入院患者では，農薬，医薬品，ガス，家庭用品の順だった．農薬では，パラコート，有機リンが多かった．死亡例はパラコートのみで死亡率は53%であった．中毒患者の年齢は，外来患者では1歳未満が比較的多く，入院患者では12歳以上が多かった．医薬品による入院患者ではベンゾジアゼピン系鎮静・睡眠薬が多かった．農薬と医薬品による自殺企画は，入院患者の過半数を占めた．

9）遅発性末梢神経障害を呈した有機燐酸中毒の1例

釈永　清志（立川綜合病院麻酔科）
山崎　光章・伊藤　祐輔（富山医薬大麻酔科）
樋口　昭子（富山県立中央病院麻酔科）

有機燐殺虫剤（ディプテレックス乳剤®）を服用し遅発性の末梢神経障害を呈した症例を経験したので報告する．

症例は50歳男性．昭和63年1月29日，17時30分頃，車庫で意識不明の状態で倒れているところを家族に発見された．救急車にて某病院に担送されたが，原因不明のため20時30分富山医薬大付属病院麻酔科に転送された．

急性期には意識障害，呼吸不全の他，消化管びらん，急性膵炎等を呈したが，集中治療により回復した．しかし，第20病日を経過する頃より，四肢遠位側優位の疼痛と運動麻痺（wrist drop，foot drop）を認めた．有機燐剤の一部には本例の様に遅発性末梢神経障害を呈するものがあり，充分な注意が必要である．

10）慢性疼痛入院患者3例にみられたヒステリー発作

穂苅　環・渡辺　重行・森岡　睦美・下地　恒毅（新潟大学麻酔科）
原　祐子（山形大学麻酔科）

ヒステリーは精神科領域における神経症の1つである．痙攣，運動麻痺，失声など種々の身体症状として現われ，周囲の関心をひくことを疾病利得とするものを転換ヒステリーという．今回演者らは，10年に及ぶ慢性疼痛患者3例がペインクリニック病棟入院中にヒステリーと思われる全身痙攣，後弓反張発作をおこし，うち1例は治療に難渋したことを報告した．

3例は皆家庭的に恵まれず，将来に不安が強かった．疼痛も難治性で，主治医も治療に苦慮し，患者との関係に問題があったことを否定できない．注目を受けたいという潜在意識は，裏返せば医師，看護婦，家族の愛が足りなかったことの証明であろう．

11）新潟市民病院麻酔科外来を受診した顔面痛患者の統計的考察

丸山　正則・小形　雅子・北原　智子・小野寺真由美（新潟市民病院麻酔科）

当院に麻酔科外来が開設されてからやがて10年が経過する．10年間のデータ検索の1つとして今回顔面痛について調べた．

当院外来の新患数は年間約150～200人見当であるが，この2年ほどは，やや増加傾向にある．顔面痛はほぼこの1割で，年間10～20人程度であった．その内訳をみると帯状疱疹がその半分を占め，次いで三叉神経痛，非定型顔面痛の順であった．帯状疱疹は第1枝領域に多く，全例 SGB が施行され，PHN への移行例は意外に少なかった．三叉神経痛の治療としては，手術療法もあるが，少なくとも1枝のみ（特に眼窩下神経，第3枝など）に限局している三叉神経痛の場合には，やはり神経ブロック療法が第1選択と思われた．

12）星状神経節ブロック（SGB）により自覚症状の改善がみられた網膜色素変性症の1例

西村　喜宏（誠心会吉田病院麻酔ペインクリニック科）
高橋　利明・山川　浩司（同　整形外科）
冨田美佐緒（新潟大学麻酔科）
坂井　豊明（新潟県立吉田病院眼科）

網膜色素変性症は原因不明の遺伝性疾患で眼科において種々の治療がなされてきたが，いまだに有効な治療法がない．最近ペインクリニック領域で網膜色素変性症に対して SGB が症状の改善に有効と言われている．今回，網膜色素変性症の患者に繰返して計82回 SGB を行ったところ，読めなかった新聞の字が読めるようになった等の自覚症状の改善が認められた．視野，視力については，SGB 施行前後で差があるとは言い難いという結果となった．しかし網膜色素変性症に対して有効な治療法がない現在，今後もこの患者に対して SGB を続けて経過を観察したい．